修士論文概要

現代モンゴルのキリスト教会によるコミュニティとの関係形成

～教会の社会的活動の実態調査から～

学籍番号　18MD0222
氏名　矢田紫野

研究の目的と方法

本論文は、現代モンゴルのキリスト教会が援助をはじめとした社会的活動を通じてどのように各種コミュニティと関係形成を行なっているかを明らかにすることを目的としている。すなわち、モンゴル社会において一般的に「キリスト教会はモノを配って人を引きつけている」という言説が流布しているが、実際のところ教会はコミュニティとの関係形成を有利に運ぶために援助活動を利用しているのか、それともこの言説は事実とは異なるのかを、教会と各種コミュニティ間のソーシャル・キャピタルを軸に考察していく。

筆者はモンゴルにおいてキリスト教系 NGO 関係者として 2007 年以降現地での活動に従事しているが、モンゴルの教会が自らの経済力を越えた物資配布や無料福祉サービスを積極的に行うのを見聞きするにつけ当初戸惑いを感じた。なぜなら長らく日本でキリスト教会の活動に関わってきた筆者としては、各個のキリスト教会の活動は基本的に教会員の献金を原資とし、その範囲で行うものと認識してきたからである。さらに注意して観察していると、モンゴルのキリスト教会のそういった活動の背後には外国のキリスト教会・団体が密接に関与している例が少なくないこと、またそういった援助に対する賛否両論が教会内外にあることも耳にするようになった。これは何が起きているのだろうか。それが本論文の問題意識の根幹にある。

現代モンゴルのキリスト教会の形成は、1990 年代初頭に起こった民主化前後から始まる。民主化後の経済的社会的混乱の中で国外から流入した宣教師は人道支援を行うと同時に宣教活動を行い教会数が急増した。またモンゴルへの宣教師来訪は、世界的に福音主義キリスト教が拡大している潮流の中に位置付けられるものでもあり、結果としてモンゴルのキリスト教会は大半が福音派である。

しかし一方で、一般社会からはキリスト教会に対する批判的な言説も見られるようになった。「教会には外国人がやってきて、物を配ったり英語を教えたりして人々を引きつけている。だから、教会に通うのは若い人か貧しい人である。つまり、キリスト教は、仏教のようにモンゴル人の生活や精神と深く結びついたものではない。彼らの教会は、実利的な関心で結びついているのであり、本当の宗教、信仰とは言えない」という定型的な語りを滝澤は記しているが[滝澤(2015)

p.182]これは筆者も現地で耳にすることで、またそのように評価されている教会が一部存在していることも事実である。

実際、キリスト教会の宗教活動や援助活動の多くはすでにモンゴル人主体であるが、程度の違いはあれいまだ外国人宣教師・団体や諸外国のキリスト教系 NGO の経済援助に依存するものが少なくない。一方キリスト教会数の増加と並行して、民主化以降現在に至るまでモンゴルの社会福祉・地域開発分野では少なからぬ数のキリスト教系国際 NGO が活動している。

モンゴルにおけるキリスト教の拡大に伴い、キリスト教会はいかなる社会的活動を行い、またコミュニティとの関係形成を行なってきたのか。それは滝澤が紹介した「教会はものを配ったり英語を教えたりして人を引きつけている」といった一般社会にある批判的言説のようなものであるのか否か。本論文では 2019 年 6 月から１２月にモンゴル国ウランバートル市の教会の牧師、教会リーダー、キリスト教系 NGO 責任者等 15 名を対象に行ったヒアリング調査の結果を元に、キリスト教会が社会的活動を通して教会を取り巻く各種コミュニティといかなる関係形成を行なっているかを明らかにしていく。

参考文献　　滝澤克彦（2015）『越境する宗教---モンゴルの福音派』新泉社

論文の構成

第 1 章　論文の概要
1-1 研究の目的と方法
1-2 先行研究と用語の定義
第 2 章　ソーシャル・キャピタルと宗教
2-1 ソーシャル・キャピタル概観
2-2 ソーシャル・キャピタルと宗教
2-3 小括
第 3 章　プロテスタント福音派概観
3-1 福音派の特質と社会的活動の位置付け
3-2 20 世紀以降の福音派の世界的拡大傾向
3-3 小括
第 4 章　モンゴルにおける宗教史とキリスト教
4-1 モンゴル社会と伝統宗教
4-2 モンゴル社会とキリスト教宣教
4-3 小括
第 5 章　現代モンゴル社会における宗教状況と宗教政策
5-1 現代モンゴル社会の宗教状況とキリスト教宣教
5-2 モンゴル政府の宗教政策
5-3 小括
第 6 章　モンゴルにおけるキリスト教会の活動実態
6-1 ソーシャルワークの宗教的理解
6-2 教会・キリスト教系 NGO の活動
6-3 教会活動への外国人宣教師・団体の関与形態
6-4 教会・キリスト教系 NGO の活動形態諸要素間の関連性
6-5 小括
第 7 章　援助を介した教会と諸コミュニティの関係性
7-1 コミュニティのレベル
7-2 各コミュニティ間の関連性に関する考察
7-3 信頼関係形成効果が低い非継続的・低頻度援助が行われる要因
7-4 非継続的・低頻度援助活動の動機としての「信仰的確信」
7-5 結論
第 8 章　結論
8-1 総括
8-2 本論文の限界と今後の課題
参考文献一覧
図表目次
参考資料

論文の概要

本論文は８章で構成されている。

第１章では、本研究の目的と方法、および先行研究と用語の定義を明示した。

第２章では、ソーシャル・キャピタルと宗教の関わりに関して論じた。本研究では調査結果の分析にソーシャル・キャピタルを用いたが、これはコミュニティ間の上下関係、強弱、関係の形態等を分析する上で有益なためである。ソーシャル・キャピタルは一般的には規範、信頼、ネットワークを基本的な構成要素とすると考えられているが、各概念はさらに類型化されている。またソーシャル・キャピタルは近年宗教研究の領域でも研究が進められるようになってきている。

第３章では、モンゴルにおけるキリスト教の大半は福音派のためプロテスタント福音派を概観した。福音派とは本来的には 16 世紀の宗教改革で起こったプロテスタントの伝統を継承する保守的神学に立つ一派を指す。伝統的に伝道活動と並行して慈善活動も行なってきたが、20 世紀前半の一時期神学的理由により社会的活動から距離を置くようになった。しかし 20 世紀後半以降再度伝道と社会的活動を包括的に捉え直す動きが活発化し、現在に至っている。一方福音派は 20 世紀後半から世界的な拡大傾向にあり、その動きがモンゴルにおけるキリスト教宣教開始と拡大につながっている。

第４章では、モンゴル史におけるキリスト教の位置付けを論じた。モンゴルではモンゴル大帝国成立の 13 世紀前後にキリスト教の影響が一部見られたが、モンゴル大帝国衰退後その影響も衰退した。一方 16 世紀以降チベット仏教がモンゴル民族の中心的な宗教となったが、20 世紀に社会主義革命が起こるとそれ以後 1990 年初頭の民主化まで反宗教政策が行われた。その後民主化に伴い西側諸国からの宣教師が流入し、モンゴルでのキリスト教宣教が開始された。

第５章では、現代モンゴル社会における宗教状況と宗教政策に関して考察した。民主化後のモンゴル国における宗教状況と宗教政策であるが、現在は６割前後が何らかの宗教を信じている。人口の５割ほどは仏教徒であるが、１％強がキリスト教信仰を持っている。モンゴルの法制度は仏教優遇傾向にあり、宗教的マイノリティであるキリスト教会は公的にもインフォーマルにも不利な状況に置かれていることが少なくない。

第６章では、モンゴルにおけるキリスト教会の活動実態を明らかにした。すなわちモンゴル人キリスト教徒によるソーシャルワークの信仰的理解と、教会で行われているソーシャルワークの実態、および教会活動に関与する外国人宣教師・団体の活動形態に関して考察した。これは 2019 年にモンゴル国ウランバートル市にある複数のキリスト教指導者に対して行なったヒアリング調査の結果を分析したものである。

ソーシャルワークの宗教的根拠として「宗教的救済」「隣人愛の表出」「善行の実践」が挙げられることが明らかになった。また宣教論的には大半が直接伝道を重視する、もしくは包括的視点に立った宣教観に立っていると考えられる。

教会･キリスト教系 NGO の具体的な社会的活動としては社会福祉的な援助からインフラ整備まで幅広い。それら教会の活動は低予算で行われるものは自己資金で、予算が高額になるものほど外部資金に活動原資を依存する傾向にあるが、同程度の予算の活動を比較すると、非継続的・低頻度の活動の方が継続的･高頻度の活動よりも外部資金に依存する傾向が見られる。これには、外国人宣教師・団体が現地での活動への関与だけでなく「資金・物資提供型」の活動をすること

が往々にしてあり、それが教会が非継続的・低頻度活動を行う際に外部資金に依存する傾向を促進していると考えられる。

第7章では、キリスト教会が援助などの社会的活動を通して各種コミュニティとの間にいかなる関係形成を行なっているかを考察した。

教会コミュニティが関与する各種コミュニティとしては、地域住民をはじめとした教会外コミュニティ、公共機関・団体、また教会活動に影響を与える外国人宣教師・団体が存在する。

モンゴル社会において宗教マイノリティである教会は社会的に下位に位置するが、援助活動などの社会的活動を行うことで逆転した垂直関係を形成し教会外コミュニティに対して上位に立つ。これはまた公共機関・団体との関係形成上交渉力を生む効果を持ち、マイノリティである教会にフォーマル・インフォーマルにも社会的保障を生み出す効果がある。

また社会的活動は教会が地域住民との間に継続的な関係を形成促進・強化する効果もあるが、一方で地域住民との関係形成が不成立に終わる、もしくは反発が起こるという結果も起きる。

援助活動のうち継続的・高頻度の活動はその性質上地域住民とのより安定した信頼関係形成を促進する効果があるが、一方で非継続的・低頻度の活動も一定程度行われる傾向にある。非継続的・低頻度活動は新規の関係形成目的、もしくは既存の関係の維持強化という目的で行われる場合、効果を発揮するが、そのような条件になくても実施されることがある。その要因のひとつである外国人宣教師・団体が持つ背景としては、近年海外宣教方策が従来の長期宣教師派遣から短期的活動に変化し、それに伴い短期間で結果が出やすい活動が好まれる傾向がある。一方モンゴル教会側の要因としては、非継続的・低頻度の活動はより簡便で即効性があること、また組織力、経済力が十分にない教会としては外国人宣教師・団体が提供する援助活動の仲介機能を果たすことが宣教活動実施につながるとの信仰的確信があるなどが挙げられる。この信仰的確信による行為は神学的には否定されるものではないが、社会学的には負の作用を起こす可能性もあり、より注意深い考察が必要であろう。

第8章では本論文の結論として、当初の問いであった、モンゴル社会に一般に流布している「キリスト教会はモノを配って人を引きつけている」という言説の真偽に関して考察した。すなわちこの言説はある面では実態の一部を表しているともいえる。なぜなら実際教会は非継続的・低頻度の活動を一定程度行なっているからである。しかし必ずしもそういった活動に関わるすべての人々が教会コミュニティに定着しているとは限らない。また他方ではこの言説は実態の一部だけを強調しすぎているとも言える。教会は宗教活動をはじめとした継続的・高頻度の活動を多数行なっており、それがソーシャル・キャピタルとなって教会外コミュニティの人々との関係形成に寄与し、また新たなコミュニティ形成の原動力ともなっているのである。

また本論文の考察を通じ、教会が行なっている宣教スタイルは援助と宣教を並行して行う外国人宣教師・団体の宣教スタイルを踏襲しているが、それが逆にモンゴルにおけるキリスト教宣教拡大の障壁になっているのではないかという新たな仮説が生じた。それは「外国人宣教師・団体―教会」の関係性と「教会―教会外コミュニティ」との関係性は様々な点で異なっており、同じ宣教スタイルを踏襲しても生じる結果は異なる。関係性の差異を考慮に入れないまま宣教スタイルだけを踏襲することは長期的には宣教の障壁となるのではないかという問いである。しかしこの仮説は本論文では十分に考察するに至らなかったため、今後の研究課題である。